

ドイツの学生に見る「書」の感受 —筆脈とデフォルメに焦点を当てて—

山本和弘 (岡山大学大学院教育学研究科)・奥忍 (岡山大学教育学部)

本研究の目的は、漢字を持たない文化圏における書の観賞について最重要とされる筆脈とデフォルメの感受を明らかにすることである。本稿では、様々な専門をもつドイツの大学生を対象に行った実験結果を、日本における同種の実験結果と比較する。考察の結果以下の結論を得た。

- ① 書は、可読性が書き手と観賞者の間の共通項として重要な働きを持つ。しかし、一方で観賞者は読むことのできない文字に対しても、内的自己と照らし合わせて観賞することができる。
- ② 書き手の制作意識は「筆脈」により観賞者に感じ取られる。
- ③ 書作品は、障害のある書き手による場合でも作品自体の魅力によって観賞者の心をとらえる。
- ④ 書は、漢字文化圏を越えて世界に広がる可能性を持ったグローバルな芸術領域である。

キーワード：筆順、筆脈、線芸術、デフォルメ、障害者

I. 研究目的

本研究は、観賞者にとっての書の魅力を明らかにする一連の研究の一部である。書とは用具として筆と墨を用い、文字を素材として表現する一回性の線芸術である。筆と墨を媒体にして作者の生体リズムが筆脈となり紙に線として軌跡を残す。本研究の前に様々な学部にも所属する大学生を対象とした実験を行っている¹。この実験における知見は以下の通りであった。

- ① 文字認識は観賞者の文化や育ちが大きく関係しており、可読性が必ずしも重要ではない。
- ② 筆順は書写教育の成果であるが、筆順が最重要事項ではない。
- ③ 観賞者は、行書の筆脈を感受する。
- ④ 観賞者にとっての書作品の評価のポイントは、「筆脈」にある。
- ⑤ 被験者の好みにはある程度一貫性があり、一貫してデフォルメのサンプルを選択する者がいる。それは書き手の属性とは全く関係しない。
- ⑥ 障害者による書作品を、一貫性を持って評価する観賞者が存在する。

以上の結果から、観賞者にとっての「書」の観賞について、以下のような結論を導き出した。

- ① 書は、可読性が書き手と観る者の一つの共通

項として重要な働きを持つ。しかし、観賞者は読むことのできない文字に対しても、内的自己と照らし合わせて観賞することができる。

- ② 書き手の制作意識は、「筆脈」により観賞者に感じ取られる。
- ③ すなわち「障害者アート」の枠を越えて、「書は人となり」を表し、障害も一つの個性として観賞者の心をとらえる要素を持っている。

これらの結果は、果たして普遍的な性格を有するものだろうか。前回の実験は、学校において書写教育を受け、日常生活の中で頻繁に書に接している日本の大学生が被験者であった。しかし、世界には筆による書の文化を持たない民族や国々が多数存在する。そこでの人々も書における筆脈を感受できるとすれば、線芸術としての書表現が漢字文化圏を越えてグローバルなものとして拡大するのではないだろうか。

そこで本研究では、ドイツの大学生を対象に同じ実験を行い、日常生活の中に書がほとんどなく、書写教育を受けていない人々にとって、可読性は書観賞にどのような影響を及ぼしているかについて考察していく。また、筆脈の感受は可能であるかどうかを考察した上で、均斉とデフォルメについての価値判断はどのようになされているかを明らかにする。

II. 実験方法

実験は質問紙法によって行われた。実験の手順と内容は前回と同様である。

- 1) 期 間：2006年12月～2007年3月
- 2) 被 験 者：芸術学部の学生を含む様々な学部
に所属するドイツの大学生152名
- 3) 実験内容：以下の意図を持って作成された5種
の間が含まれている。

問1：文字認識について：この問の意図は、線と点を組み合わせて表された形がどの程度文字として認識されるのかについて明らかにすることにある。被験者には、ひらかな、カタカナ、漢字、アルファベット、タイ文字、デザイン的サンプル、絵画的サンプル等を用い、文字であるかどうかを問う。

問2：筆順について：この問の意図は、「筆脈」に関する感受を見る第1段階として、表意文字である漢字を楷書で書いた場合にどの程度筆順を意識しているかを明らかにすることにある。楷書で書かれた「光」について、始筆と終筆を問う。

問3：始筆について：「筆脈」に関する感受を見る第2段階として、表意文字である漢字を連続性の高い行書で書いた場合に、始筆から終筆までの「筆脈」が一回性の線として認識さ

れるか否かという点を明らかにすることを意図している。被験者には、行書で書かれた「右」「左」について始筆を問う。

問4：この問は、「筆脈」に関する感受を見る第3段階として、表音文字である仮名の連綿体において、始筆から終筆までの「筆脈」を一回性の線芸術としてどのように認識できるかと言う点を明らかにすることを意図している。仮名の連綿体で書かれた縦書きと横書きの短歌について正否とその理由を問う。

問5：この問の意図は、毛筆で書かれた漢字1字に対し異なる造形及び筆脈の3つのタイプの中で、被験者がどのサンプルを好むかを明らかにすることである。被験者は、異なった雰囲気を持つ同じ文字3種から自分の好きなサンプルを1つ選ぶよう求められた。

- 4) 実験用紙：8頁からなり、文字が相互に干渉しないようスペースが工夫されている。本稿では、紙数の関係で、「結果と考察」の節の中で各問別に縮小して示し、全体は省略する。
- 5) 実験手順：実験者は教室に集められた被験者に対して実験用紙の冒頭に記した趣旨を読み、問について順に回答するよう指示した。
- 6) 所要時間：20分程度

III. 結果と考察

1. 文字認識について

問1 次のA～Lのサンプルについて文字であると思うものに○をつけて下さい。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L

表1はA～Lに関して「○」をつけた全被験者の結果について比率(%)で示したものである。この結果について、ドイツで認識度の高かったものから順に整理すると図1のように表すことができる。この図から、文字認識の傾向として次の点が挙げられる。

表1 文字認識に関する回答(%)

文字	ドイツ	日本	文字	ドイツ	日本
A	32.9	31.8	G	95.4	98
B	75.7	91.8	H	8.6	1
C	68.4	68.7	I	67.1	90.5
D	87.5	98	J	3.3	5.7
E	5.3	81.1	K	69.7	57.1
F	17.1	43.1	L	5.3	9.1

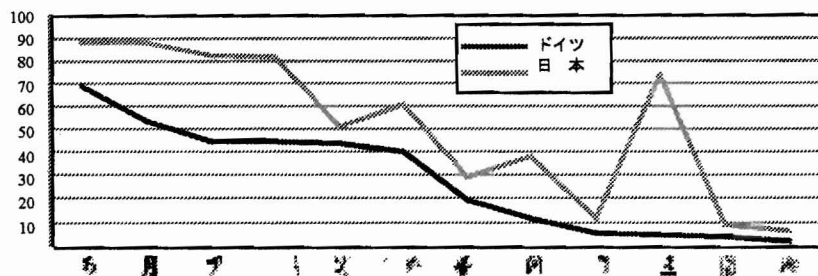


図1 文字認識 (ドイツを中心に認識度のたかいものから順) (%)

- G「月」: ドイツにおいて文字認識が最も高い。彼らにとっての漢字に対するイメージに合致していることが考えられる。漢字は、「四角いパーツの集合体」としてとらえられているように思われる。
- D「あ」とB「ア」: ドイツにおいても文字として認識する人が多い。ドイツでは、Tシャツなどにデザインとして用いられる漢字と異なり、平仮名やカタカナに接することは少ない。にもかかわらず約半数の被験者が文字と認識したのは、造形的に省略が効区と同時に単純化されていることが挙げられるかもしれない。
- I「A」: Aはアルファベットであるにも関わらず50%を切っている。その理由として、サンプルは筆で書かれた文字であり、線のデフォルメがアルファベットで用いられる西洋のカリグラフィ様式と異なっていることが挙げられるかもしれない。日本では「A」に対する文字としての認識度は「月」「あ」「ア」に次いで極めて高いことが注目される。「A」は、日本の英語教育で広く知られた文字である。日本では漢字や仮名と同様にアルファベットの単体も、デフォルメが受け入れやすいと考えられる。
- C「If」: サンプルは筆記体様の連続した線からできている。ドイツでは文字としての認識度は単体の「A」と同程度であることが注目される。その理由として、他国のアルファベットであればこのようなものもありうると考えられたと思われる。
- 日本では、「If」と「A」の文字認識度で大きな開きがあった。連続性が文字としての判読を困難にしていると考えられる。
- A「身」: サンプルは「み」と読む変体仮名である。しかし、「あ」や「ア」と同程度の結果が出なかったのは、サンプルの線の太さが変化に富んでいたためではないかと考えられる。すなわち、

より絵画的だと判断された可能性がある。日本では、書グループでは認識度が非常に高く、一方他のグループではドイツと同様に低い結果が出ている。書グループでは文字としての知識が認識度を高めていると考えられる。

- F「タイ文字」: 認識度が低いのは、点折部が曲線であることによるものと考えられる。すなわち、「月」のように「四角いパーツの集合体」でできているのではないために、彼らにとっての漢字のイメージからほど遠く、文字として認識するには至らなかったと考えられる。

日本でも文字としての認識度が低い。このような文字は存在しないので認識度が低いのは当然である。その他の理由として、ドイツと異なり、「同」や「回」の誤字として判断している可能性が考えられる。

- H「ハングル風」: 反応はドイツ、日本とも同じである。デザイン性が強いものは文字として認識されないことが理解できる。

- E「笑」: サンプルは、「竹」「夭」から構成される。竹は風を受けるとその体が夭屈(＝かがまる)し、ちょうど人が笑うようであるという「漢辞海」¹⁴⁾からヒントを得て書かれたものである。日本とドイツでは文字としての認識度の差が際だっている。日本においては、文字としての認識が高い。日本では、文字のデフォルメや装飾は日常的なものであり、それらの文字はマスメディアを通して色々な場面で流れている。「笑」という文字は、日常生活においても使用度は高く、見る機会も多い。従って、その文字のデフォルメも理解しやすいと判断できる。一方、ドイツにおいては、漢字そのものに対する親和度が日本と異なり、「笑」という文字を知っている人はほとんどいないと考えられる。デフォルメの効いた絵画性が強いサンプルの文字は、ドイツでは文字として認識されなかったといえよう。

「クレー風」と「墨絵風」：反応はドイツ、日本とも同様に低い。さらに、ドイツにおいては「笑」と同じ程度に低い点から、絵画性・デザイン性が強い形は、文字としては認識されないと考えられる。

2. 楷書による筆順について

問2 次の文字は、漢字で「ひかり」を表します。書き始めと思う線に→を入れて「1」と記入してください。また、最後を書くと思う線に→を入れて「2」と記入してください。



被験者が実験用紙に書き込んだ数字と矢印を「光」の筆順に従って整理した。始筆・終筆それぞれの点画について比率を表2に、正答の筆順とグラフ化したものを図2に示す。

表2 「光」の筆順についての回答 (%)

	正筆順	1	2	3	4	5
始筆	ドイツ	40.8	5.9	3.3	40.1	5.9
	日本	93.6	5	0.9	0.4	0
終筆	ドイツ	1.3	25.7	29.6	0.7	9.9
	日本	0	1.3	0.2	0	0



図2 ① 「光」の正しい筆順始筆・終筆の回答

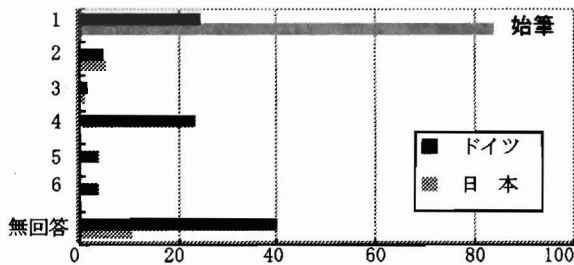


図2 ② 「光」の始筆の回答・終筆の回答

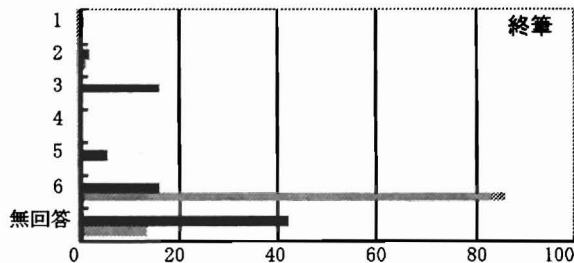


図2 ③ 「光」の終筆の回答

ドイツの被験者には筆順の認識が見られない。始筆については正答の1（縦画）と4（横画）を始筆とした回答が多く、終筆については正答の2, 3, 5, 6という回答が多く見られた。最初に全体の造形を安定させるために基準を設けているようである。最初の基準の設定後に点の位置が決められる。「光」は各画の線の長さや位置関係が多様である。したがって基準設定後の筆順のとらえ方は被験者によって異なっている。多くの場合、基準を設けた後は右回りや左回りで書く。2, 3は上部に位置しているの点ととらえて後で書くことになる。また、5は曲線、6は折れ線であるので異質なものとして最後に書き加えるという意識が働いているようである。いずれの場合にもきわめて造形的な心理操作が働いているととらえられる。図3に始筆と合わせて3例を挙げる。



図3 回答例① ② ③

3. 行書による筆順について

問3 次の文字のAは A B
「みぎ」、Bは「ひだり」を表します。それぞれ、書き始めと思う線を→で示してください。



被験者が実験用紙に書き込んだ数字と矢印を「光」の筆順に従って整理した。「右」「左」それぞれの文字の点画について比率を表3に、正答の筆順とグラフ化したものを図4に示す。

右：サンプルは、右の行書体である。点画に連続性がある。無回答を除くと、1から書き始めるとする回答が多い。ドイツの被験者は筆順の認識が低いにもかかわらず、行書であるサンプルでは、筆順に応じた筆脈をとらえている。なお、日本においては筆順＝筆脈としてはっきり理解されている。

左：ドイツの回答でも1が多い。「右」と共に筆脈を感じていることがわかる。なお、2と回答した者の中には、2の下方部から書き始めるという回答が含まれている。このことから、日本の文化では考えつかない発想も起こりうること

がわかる。

表3 「右」「左」の筆順についての回答

正筆順	右						左				
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5
ドイツ	60.5	16.5	16.5	2	2	1.3	48	30.3	5.9	3.3	10.5
日本	93.9	6.3	0	0	0	0	97.1	2.7	0	0	0

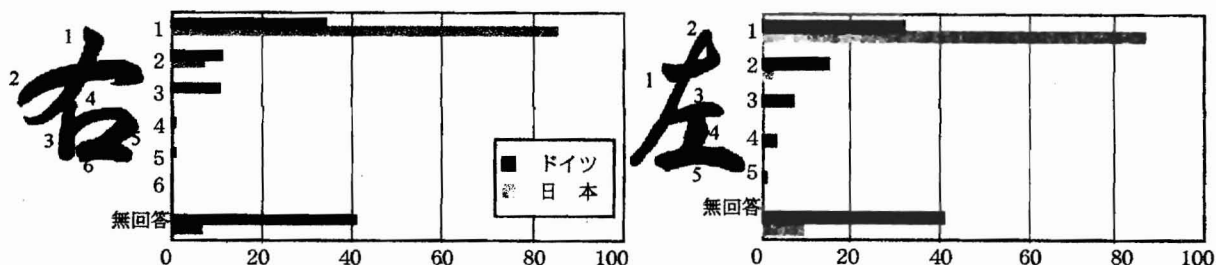


図4 「右」「左」の正しい筆順と回答

4. 書式認識について

問4 次の文章は、日本の定型詩です。AとBのどちらの向きで書かれたと思いますか。()の中に記号を書いてください。また、なぜそう思いましたか。下の項目について、5段階で該当するところに○をつけて下さい。

- a) 全体のバランスが美しい
- b) 文字の向きが正しい
- c) 線に流れがある
- d) 形がおもしろい
- e) 筆の動きが自然である

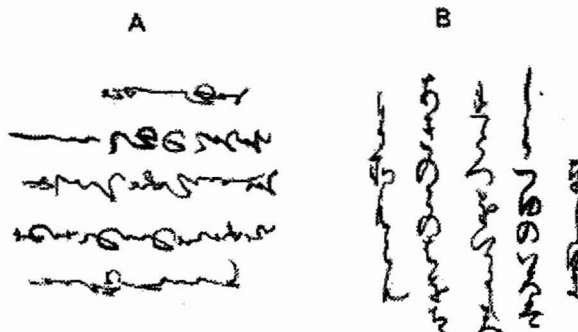


表4 書式についての回答率 (%)

	A	B
ドイツ	11.2	88.8
日本	8.6	90.5

表4は、「A」と「B」それぞれの回答数を比率で表したものである。回答では、横書き文化であるドイツでも日本と同じように縦書きを選択した被験者が横書きをはるかに上回っている。それは、回答者が「流れ」つまり「筆脈」を感受した結果であるととらえられる。

5. 評価の理由について

「A」「B」選択の回答理由について5つの選択肢を示し、SD法で回答を求めた。図5にはその結果を示している。

ドイツで「B」を選んだ被験者においては「向きが正しい」「線に流れがある」という評価が高くなっていることに注目したい。

ドイツで「B」を選んだ被験者において「バランスが美しい」という項目が極端に低い。その理由として、仮名の連綿書きに対し認識が低いためと考えられる。

ドイツにおいては、どの項目についても全体的に日本より評価が低い。しかし、「形がおもしろい」という項目は、ドイツのA、Bどちらの選択者も高くなっている。このことは、異文化に対する興味関心の高さを示しているものととらえることができる。

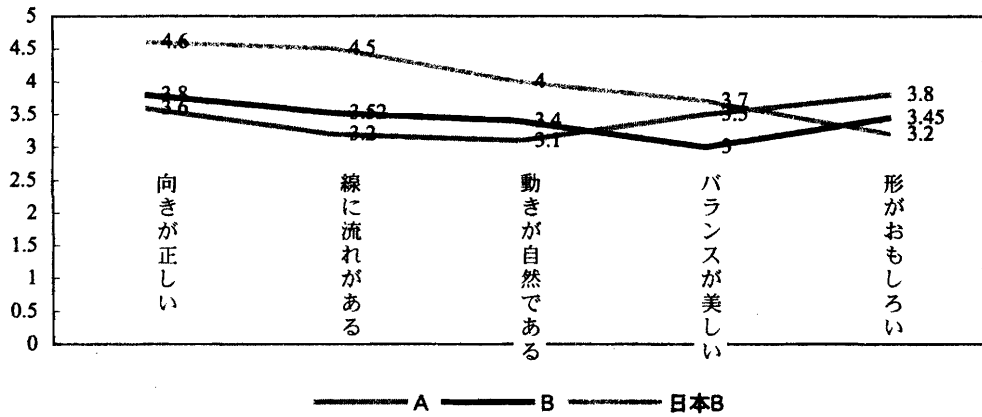
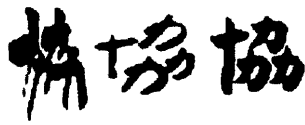
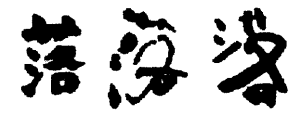

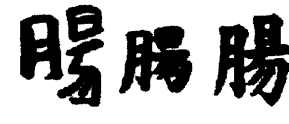
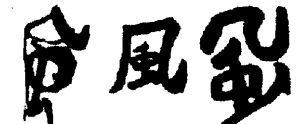


図5 ドイツのA選択者、B選択者および日本のB選択者の評価の理由

5. 好きな字について

問6 次のA～Eでは、それぞれ同じ文字の「書」が3つずつ示されています。それぞれで最も好きな「書」はどれですか。○をつけてください。

	A	B
		
	C	E
		
	D	
		

「好きな字」に関する文字サンプルの5字は3名の同じ書き手によるものである。そこで、まずサンプルの書き手とサンプルの書体について述べ、その後には被験者の回答について考察したい。

1) サンプルの書き手について

書き手である K、F、I の属性、書歴は以下の通りである。

- (1) Kについて：50歳男性。岡山県内の高校に勤務、書道と国語の教師。
- (2) Fについて：知的障害がある22歳の女性。幼い頃より書に親しむ環境があり、筆を持つ機会に恵まれた。グループ展等に出品。
- (3) Iについて：今春高校を卒業した18歳の女性。中学まで書教育を受ける。

2) サンプルの書体について

各サンプル文字は以下のような特徴を持っている。

(1) 「協」について

K：全体に角張った方勢の書体。「力」の部分で長方形でできている。横画が太く、縦画が細め。はねや払いは気にせず書かれている。

F：全体に丸い円勢の書体。払いはあるがはねはなく自由に書かれている。

I：書写体で書かれてはいるものの、偏旁ともに「四角いパーツの集合体」で書かれており、縦画の起筆は弱い。

(2) 「落」について

K：三つの部首がそれぞれ対比的に書かれ、全体が回転運動となり、デフォルメが効いている。

F：三つの部首が独立した感じで書かれており、大小・太細の変化が大きくデフォルメが効いている。

I：書写体で書かれており、正方形に納まっている。上部は横長の長方形、下部は「各」の払いの部分が短い。

(3) 「島」について

K：しっかりとした書写体で書かれている。上部は縦長の長方形、下部は横長の長方形からできている。横画は等間隔に書かれ、均等美がある。

F：全体に丸い円勢の書体。はねがなく自由に書かれている。珊瑚礁の島をイメージしそうな字である。

I：全体的に丸みを帯びた書写体で書かれている。比較的バランスに欠けている。

(4) 「風」について

K：全体として逆三角形でできている。几構え

の一面目が特に細く長い。「虫」部分の「口」は、円形に書かれ、各画の長さ、太さの変化が大きく、動きが強調されている。

F: 「几」構えの縦画が短く「虫」部分が特に多き。全体に右上がりで風がなびいている感じを受ける。全体に肉太でどっしりとしている。

I: 全体として正方形の書写体で書かれており、各部分も四角形でできている。「虫」の部分の線に弱さが感じられる。

(5) 「腸」について

K: 書写体。長方形でできた偏と隣の合体で構成されている。横画は等間隔に書かれ、均等美がある。

F: 自由に書かれており、腸のうねりも感じさせる。編と隣のバランスがユニーク。

I: 全体として正方形の書写体で書かれている。各部分も四角形でできているものの、隣の上下の四角の中心線がずれている。

3) 被験者の反応について

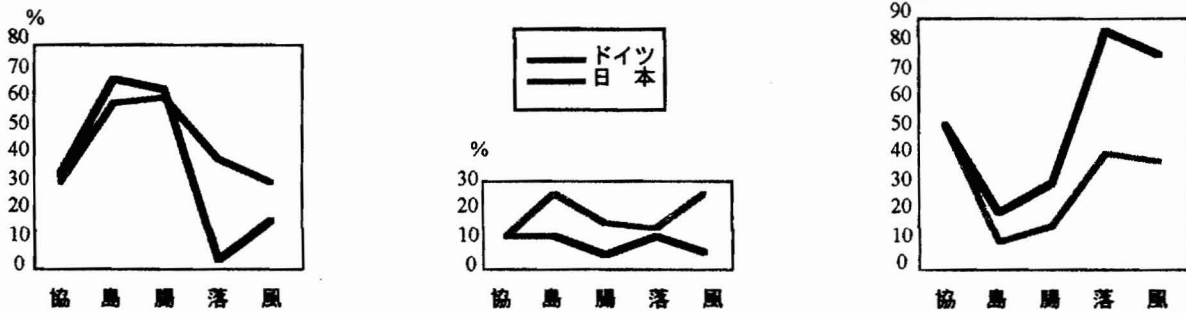
図6は書き手別に見た反応、図7は文字別の反応を図示したものである。この結果から、次の4

点が明らかになる。

① Kでは「四角いパーツの集合体」であり均斉の取れた「島」「腸」のサンプルはドイツも日本も高い数値を示した。一方、デフォルメの効いた「落」については、日本では4割の被験者が好感を示したものの、ドイツでは好感を示す被験者が皆無に近かった。

② Fのサンプルは全体として好感を示す被験者が少ない。しかし、被験者の中で日本では20%前後、ドイツで10%前後の者が好感を持っていることが注目される。

③ Iのサンプルではドイツにおいて「落」「風」が極めて高い数値となった。これは、それぞれのサンプルが最も「四角いパーツの集合体」に近いものであったためと考えられる。「協」に対する反応が、日本もドイツも同程度であった理由についても「四角いパーツの集合体」に求めることができよう。「島」「腸」については、より均斉のとれた「四角いパーツ」からなるKに流れている。



① Kに対する反応

② Fに対する反応

③ Iに対する反応

図6 書き手別にみた各文字に対するドイツと日本の被験者の選択者 (%)

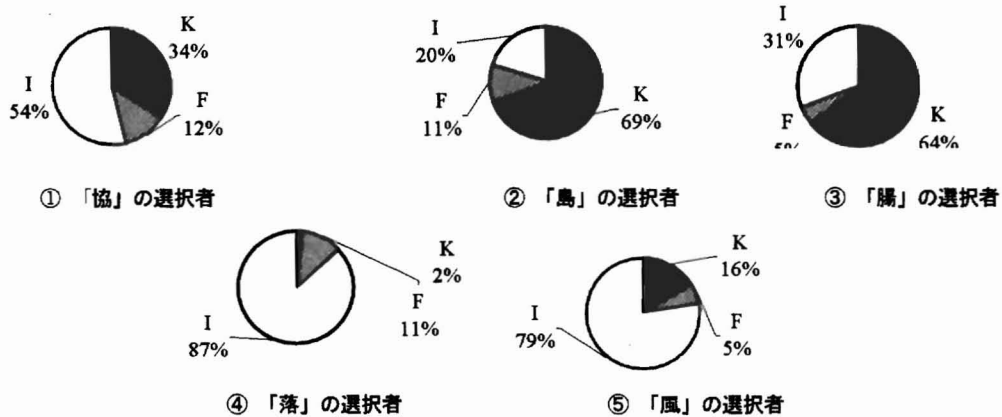


図7 文字別に見た各文字に対するドイツの被験者の反応 (%)

IV. 被験者の反応に関する考察

以上の各問についてドイツの回答を日本のそれと比較しながら考察してきた。ここで、ドイツの実験結果を日本の学生の分析結果と比較すると、全体として以下の6点にまとめることができよう。

- ① 文字認識は観賞者の文化や育ちが大きく関係しており、可読性が必ずしも重要ではない。しかし、表意文字文化圏と表音文字文化圏においてはその認識の度合いは明らかに異なる。表意文字文化圏であり書の文化を持つ日本においては、表音文字文化圏でありカリグラフィーの文化を持つドイツより、文字の許容度が高い。
- ② 筆順の指導が特になくドイツにおいては、書く順番は書き手の意志によって行われる。
- ③ 行書では、ドイツにおいても筆脈を感受することができる。このことは、筆順の指導が書観賞の最重要事項でないことを表している。
- ④ ドイツの観賞者にとっての書作品の評価のポイントは、「筆脈」に次いで「形のおもしろさ」にある。
- ⑤ 被験者の好みにはある程度一貫性があり、一貫してデフォルメのサンプルを選択する者がいる。それは書き手の属性とは全く関係しない。このことはドイツにも日本にも共通して見られる。
- ⑥ 障害者による書作品を、一貫性を持って評価する観賞者がドイツでも日本でも存在する。

ところで上記のようなドイツの被験者に見られる反応は、文字の好みに対する反応が文字の成立とその変容の歴史に対応していることを表しているように思われる。そこで、このことについて文字の歴史と変容の視点から考えてみたい。

文字の成立過程を考えると、最初は絵から始まる。すなわち、文字は表意性が高く、人々は形から判断してそのメッセージを受け取ったのである。

古代文明における文字は、表意性の高いものであった。エジプト文字(ヒエログリフ)、メソポタミアの楔形文字の原型は、いずれも文字そのものがそれぞれの意味・内容を伝えるものであったⁱⁱⁱ。中国の漢字については、半坡遺跡から出土した刻画符号陶片に見られるように紀元前4000年には、絵から発達した象形文字が作られていた。すなわち極めて原始的で絵とも見えるし文字とも見えるものであった。

時がたつにつれ人間の意志伝達は、具体的なものに止まらず抽象的なものも加え発展していった。抽象的な概念は、絵になりやすく、文字化は難しい。そこで、既成の文字の音を借りて別の意味を表現した。また、部分を応用して新しい文字を作り出すようになっていった。その結果、文字の形の変化や使用方法によって最初の表意性は失われていき表音性が高まっていった。

アルファベットは紀元前1500年頃フェニキア人が発明したとされる^{iv}。表音文字であるアルファベットは、自分の意志を伝えるためには誰が読んでも判りやすい文字である必要があった。簡素化・省略化された文字においては、形そのものを変化させれば、判読は不可能になってしまう。そこで、原型をとどめつつもデザイン的に文字を美しく見せようとするカリグラフィーが発達していった。

一方、中国では、紀元前1300年頃、甲骨文字が使用される。文字数も格段に増え、文章としてのまとまりが見られるようになった。これらの文字には、占筮的・呪詛の意味があり亀甲獣骨に記された。亀甲獣骨に刀で彫るため筆画は直線化していった。更に紀元前220年頃、秦の中国統一にともない篆書へと移行していく。篆書は、左右対称のシンメトリー性を特徴とした書体である。また、紀元105年には蔡倫が発明したといわれる紙と毛筆と墨を使用した書は、時代の変遷にともない篆書から更に隸書、楷書へと変化し、均斉美が追求されていった。

その後、中国の書の美は、相称・シンメトリーの美しさに止まらず、用途に応じて様々な方向で追求され変化していく。特に行書体や草書体は、筆脈を通し均衡の美が表現された。そこでは、一文字だけの美に止まらず、連続する一連の文字のバランスによる調和や全体における部分との均衡が、筆脈を通して探求された。

日本では、平安時代において表音文字である仮名が漢字の草書体をさらに簡素化され成立した。また、有糸連綿でもって一文字一文字を繋ぎ、余白の美をとめない中国とは異なった独自の発展を遂げた。

均斉は広義では均衡を意味し、狭義では相称・シンメトリーを意味する^v。均斉の取れた文字とは、左右の形が大体において相等しく、分量や形状が似ており、安定した美しさがある文字を指す。相

称・シンメトリーの美は、多くの人に受け入れられやすい美しさである。書き手にとっては偏や旁あるいは冠といった四角いパーツを組み合わせ集合させることで均齊のとれた文字ができあがるという利点がある。しかし、均齊のとれた文字は安定した美しさはある一方で、変化に乏しい傾向がみられる。

今回の実験結果を、このような書体の歴史的変容の始点から見ると、漢字を見慣れないドイツの被験者の多くが「四角いパーツ」からできている均齊のとれた文字を選び、一方、漢字が日常生活に溢れている日本の被験者は、変化のおもしろさを感じて、デフォルメの効いた文字を選ぶ者がより多くみられたことが注目される。

V おわりに

以上の考察と日本の学生の分析結果を総合して考察すると、観賞者にとっての「書」の観賞について、以下のような結論を導き出すことができる。

- ① 書は、可読性が書き手と観る者の一つの共通項として重要な働きを持つ。しかし、観賞者は、読むことのできない文字に対しても内的自己と照らし合わせて観賞することができる。
- ② 書き手の制作意識は、「筆脈」により観賞者に感じ取られる。
- ③ 障害者による書は作品自体の魅力によって観賞者の心をとらえる。このことは障害者による書が「障害者アート」の枠にとらわれない魅力を持つ

っていることを意味している。

- ④ 線芸術としての書は、東アジアの固有の文化として価値あるばかりでなく、漢字文化圏を越えて世界に広がる可能性を持ったグローバルな芸術領域である。

【謝辞】

本稿を作成するにあたって多くの方々からご協力を得ました。ドイツのビーレフェルト大学の B. Clausen 教授と同大学日本語講師石岡真治氏、そしてアンケートに快く応じていただいた先生方、学生のみなさまに心から感謝の意を表します。

【注】

- 1) 山本和弘・奥忍「〈書〉観賞試論—筆脈とデフォルメに焦点をあてて—」『芸術教育実践学会誌 8』 pp. 25-32、2007.
- 2) 戸川芳郎監修『漢辞海』三省堂、p. 1044、2003.
- 3) 藤村克裕『造形の基礎を学ぶ』角川書店、p. 143、1998.
- 4) 浜田圭三「文字の歴史」
http://homepage2.nifty.com/keijihamada/mojino_rekisi.html
- 5) 平山観山『書の芸術学』有朋堂、p116、1973.

Title : Appreciation of Japanese Calligraphy by German University Students: Focused on “Hitsumyaku” and Deformation

YAMAMOTO, Kazuhiro (Graduate School of Education, Okayama University)

OKU, Shinobu (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : Purpose of this study is to examine appreciation of most important factors in Japanese Calligraphy, “hitsumyaku” and “deformation” by German university students of various major field, who have not been grown up out of “kanji” culture. Comparing the results with our former examination for Japanese students, following results were made clear;

1. Even though readability of letters plays an important role between calligrapher and viewer in generally , viewers can appreciate unreadable letters with reference to his/her own inner mind.
2. Calligrapher’s intension can be appreciated through “hitsumyaku”.
3. Calligraphy by handicapped people can appeal to viewers without knowing about the calligrapher’s handicaps and their letters themselves can attract viewers.
4. Calligraphy which is consist of various lines is a global art being able to appeal people across the kanji culture.

Keywords : writing order, *hitsumyaku*, linier art, deformation ,handicapped people
